

ウィラーヤトの存在論

松本耿郎

ウィラーヤトの形而上学的意味領域

イスラーム哲学の伝統においては存在の諸相が様々な角度から研究されてきている。今日までこのイスラーム哲学における存在論についての研究は主として存在と本質の相互関係や、唯一なる純粹存在の「多」への変化の過程といった分野に限られていた。しかしながら、存在をこのように純粹形而上学の領域においてのみ考察していたのでは、イスラーム哲学における存在概念が持つ豊饒な内容の理解には程遠いものにしか到達し得ない。存在論は単に、「ある」とか「ない」とかいうだけの議論ではない。ものの「ある」とか「ない」ということは確かに最も初歩的な問いかけである。しかしながら、このような初歩的レベルの議論だけでは存在の現実の「働き」はなかなか見えてこない。存在の「働き」を見ることによって、初歩的レベルでは均質で一様に見えていた存在が多種多様の相貌を持つものであることが明らかになる。

存在は根源的レベルでは超経験的であるから意識の表層部と直接関係を持たないものである。意識の表層部は多性の成立する次元である。この次元で語られる存在は、なんらかのものが「ある」とか「ない」とかいう意

味のものである。したがって、このレベルでの存在は普遍的で意味の希薄な内容の概念になってくる。このレベルでは存在よりも本質と属性のほうが豊かな内容を持つ。しかしながら、ひとたび存在の本質に対する先行性が認識されると、この場合の存在は表層レベルでの多性を生み出す生産的で豊饒なものとして捕えられる。

イスラーム哲学における存在という理念が持つこのような生産的で豊饒な内容を理解するためには、存在に内属し多様な事物の創出を司る「ウィラーヤト」wilāyat, wilāyah の意味を考慮にいれておくことが必要である。なぜなら、イスラーム哲学においては存在がこのような生産性を持つものとされているゆえに、そのようなレベルでの存在を神と同一視していて、神と事物との存在論的關係がこのウィラーヤトという視点から捕えられているからである。もともと、ウィラーヤトという言葉は“近くにあること”とか“親しみのある保護”というような意味である。この概念は神の名称の1つであるワリー wali (保護者) に由来する。すなわち、神は森羅万象の1つ1つにたいして保護者として臨んでいる。その限りで、神は1つ1つの事物についてウィラーヤトを持っているのである。同時に個々の事物は神に“近しさ”としてのウィラーヤトを持っていることになる。じつはこのウィラーヤトという概念がアーヤトッラー・ホメイニーの“法学者の監督権 (ウィラーヤテ・ファキーフ)” の思想形成にも大きな影響をおよぼしているのである。したがって、ウィラーヤトの研究はイスラーム存在論の研究において見落とされている側面に光をあてるものであるとともに、イスラーム政治思想の存在論的側面を明らかにするものとなる。ところで、近世においてこのウィラーヤトの概念についてもっとも深い思索をしたのはアガー・ミールザー・ムハンマド・アリー・シャーハーバーディーであるとされている。シャーハーバーディーはアーヤトッラー・ホメイニーの師のひとりである。ラフイーイー・カズヴィーニーと同じところにコムムの学院でイスラーム哲学の講義をしていた人物である。テヘラン大学のイブラ

ーヒーミー・ディーナーニー教授によればシャーハーバーディーのウィラーヤトについての説がアーヤトツラー・ホメイニーのウィラーヤト思想に強い影響を与えているという。そこで始めにシャーハーバーディーのウィラーヤト論を見ておきたい。

「ウィラーヤトには2種類ある。すなわち、1つは創造的ウィラーヤト（ウィラーヤテ・タクヴィーニー）で、もう1つは立法的ウィラーヤト（ウィラーヤテ・ダシュリーイー）である。創造的ウィラーヤトはさらに2種類に分かれる。その1つは必然的ウィラーヤトで、もう1つは自発的ウィラーヤトである。

さて、必然的な創造的ウィラーヤトは存在の降下弧（絶対無分節の根源的存在が個別的存在のものとなって出現してくる流出プロセスを“存在の下降弧 (qaws nuzūlī)”の中にあり、自発的な創造的ウィラーヤトは“存在の上昇弧 (qaws su’ūdī)”の中にある。というのは、“隠れたる宝”、“純粋無分節である存在そのもの（フーイーヤ）のレベル”を経た後に存在のリアリティーは、次に純粋存在（神）の本質の本質にたいする**収斂的な知的自己開示**の純粋一性（アハディーヤ）のレベルを経る。さらに純粋存在の本質の本質にたいする**展開的な知的自己開示**であるワーヒディーヤ（統一的存在）のレベルを経た後に、可能的諸本質のアーキタイプにおいて存在の顕現、闡明がある。このレベルが“欲せられた層”と呼ばれている、「神が事物を欲求によって創造し、また欲求そのものも創造したというとおり」、すなわち、あらゆる完成と美を所有する本体が欲求により事物を創造し、さらに欲求をも自ら創造したのである。これは他の者の欲求によるのではない。さもなくば、無限連鎖に帰着する。言い換えれば、すべての事物の存在は純粋存在の絶対的顕現、闡明によるということである。このレベルはさらに“慈愛者の慈愛”、“慈悲者の慈愛”、“広がる影”、“創造された

真理”、“唯一の命令”、“真理の言葉”とも呼ばれている。必然存在者に依存するこの影のような顕現と存在は、それよりも神の本体に近いものはないところの存在である。さらに、絶対顕現と自己開示の本質闡明のレベルの次には垂直的、水平的理性体や普遍靈魂と個別靈魂の天界的、イデア的実体化という中間世界のレベルに到達する。そしてついに存在流出は質料世界、第一質料に達する。それは神の玉座の物質形相を獲得する。それは運動の起源となる本性を帯び、その結果、跪拝する天使の場である“光の世界”と悪魔とジンの場である“火と煙の世界”が現れる。その次に、単純元素が存在の衣を身にまとい、そして遊星や金属のような鉱物的複合物に至る、その結果、植物的複合物が出現可能となる。植物的複合物の過程が終点に達すると、動物的複合物が存在領域に歩を進めることになる。そして、動物的複合物が最高点に達すると、存在という衣は人間の姿に切り出される、そして最下層に位置する人間的複合物は第七地より頭をもたげる。ここにおいて、下降弧は完了する、そして本質的完成の理解と達成ののちに高度の完成を求める上昇弧が始まる。」¹⁾

シャーハーバーディーは存在の根源からの世界生成、とりわけ人間の出現のプロセスをこのように説明する。この創造のドラマのプロットは伝統的イスラームの宇宙創成観にほぼ一致する。ともかく、このように宇宙生成のプロットの中で人間存在を位置づけしたうえで、さらに次のように続ける。

「もしも、神の恩寵が人間を包み、人間があらゆる係縛をとり除くことができるになれば、人間は有限な世界から絶対無条件の世界に到達し、絶対的欲求と顕現のレベルに住し、上昇弧における自発的な創造的ウィラーヤトが獲得されて、彼において存在の円周は完了す

る。“ちょうど、彼らが、われわれは神の欲求である、というように。”
すなわち、(神の)欲求より発生して、(神の)欲求に到達するのである。

さらにまた、人間について、“創造主が汝によって存在の円周を開き、
汝によってそれを閉じ、汝によって天を地上高く保ち、汝によって雨
を降らせる”と言われることも正しい。換言すれば、汝によってあら
ゆるものを創造したのである、なぜなら汝は創造主の欲求であり、そ
の絶対的顕現であり、かの御方の聖なる本体はあらゆるものを欲求に
よって創造しているからである²⁾。」

この文脈の中で語られている創造的ウィラーヤトは、存在の太源から発
出した存在流出が流出の最下位の可感的事物としての人間に到達し、そこ
から再び太源への回帰の旅路をたどる過程で、人間の到達しうる最も高い
境地として語られている。それは、神の欲求と同義なものとして認識され
ている。この境地に到達した者は神の意欲・欲求において意欲を持ち、神
の欲求において求める。したがって、そのような人間においては世界はそ
の者の意欲のとおりであり、それは神の望むところと同じものとなる。

この創造的ウィラーヤトは太源への回帰を真に求める人間によって獲得
され得るものなのである。すべての人間がこの創造的ウィラーヤトを獲得
するというわけではない。しかしながら、重要な点はこの創造的ウィラー
ヤトが人間の自発的な獲得の意欲と努力によって獲得されるという点であ
る。この点、立法的ウィラーヤトと違っている。立法的ウィラーヤトは基
本的には神にのみ属しているものである。

他方、ウィラーヤト（保護者権あるいは監督権）の概念はヒラーファト
(khilāfat, khilāfah)の概念と密接な関係を持つ。ヒラーファトという概念
は、一般にイスラーム共同体の長であるカリフ（より原語にちかい表記を
すればハリーフア、khalīfah）という語と同語源である。カリフがもともと
預言者ムハンマドの“代理人”という意味であるので、ヒラーファトとい

う語は“代理権、代理人職”という意味で理解されている。このカリフ（代理人）という言葉が預言者ムハンマドの“代理者”を意味していたにもかかわらず、時代と共に“神の代理者”という意味に変わっていったということはよく知られている。もっとも、歴史上どの時点でそのような意味の変化が起こったのかという問題についてはいろいろな議論がある。これまで、アッバース朝時代になってからそうなったと信じられてきたが、最近の調査では、ウマイヤ朝時代にすでにカリフという語が“預言者の代理人”でなく“神の代理人”という意味でもちいられていたという説が立証されている。

預言者は神の使いとして信徒集団に臨み、神の言葉を彼らに伝えたのである。神の言葉を伝えるという仕事は預言者にしかできないことである。預言者の代理人たる“カリフ”には神の言葉を伝える能力はない。預言者の代理人としてのカリフは、神の言葉を伝えるという仕事を除いて、預言者が行ったことすべてを模倣してゆかなければならない。信徒集団の運営、軍事、裁判、行政などさまざまな事項を決裁し実行してゆかねばならない。しかし、共同体の規模が預言者の時代のものと比較して巨大なものに発達してしまった時代においては、預言者の時代の規模の共同体における預言者の役割の再現をしようとしても不可能な話である。この時点で、カリフは“預言者の代理人”であることが不可能になり、別な意味づけを必要とするようになる。

すでに、預言者の在世中、彼は“神の代理人 khalifah Allah”と信徒から呼びかけられることがあった。それは神の意志を執行する者であるからそのように呼ばれたのである。この場合、預言者は神と人との接点となる。預言者の存在を通じて神は人をも含めた全存在にたいして働きかける。全存在は預言者を通じて神に依存することになる。その後カリフがこの役割を果たす者として理解されるようになり、この意味で、神に代理者と呼ばれるようになる。もちろん、この場合でも代理人としてのカリフは預言者の

ように神のメッセージを人々に伝えることはできない。しかし、神からすでに送り出された様々のメッセージの意味を確実に保持するものとして機能することになる。カリフは神の意志の現れとしてのシャリーア（イスラーム法）を実行することで神の代理人となり得る。この場合、預言者の代理人として神の意志を執行しているのではない。神の直接の代理人としてシャリーアを執行するのである。シャリーアの定める事項はそれ自体で一定の現実的効力を持つのであるが、倫理的規範としての効力に留まらず、カリフがシャリーアの執行を通して法的事実を作り出すことで神の意志を具体化する。こうして、神の法を執行する“神の代理者”としてのカリフという概念が定着する。もちろん、この概念の内容規定をめぐる熾烈な議論がイスラーム共同体の中で戦わされたことはいうまでもない。このような意味での神の代理者となれる人物については厳しい条件がいくつも設けられた。そのような条件をめぐるもまた多種多様な意見が提起されている。

神の代理権（ヒラーファト）の形而上学的意味

神と被造物の接点としての“神の代理人”という意味でのカリフもしくはハリーフという概念、およびそこから出てくる“神の代理権”という意味でのヒラーファトという概念はシーア派の思想世界で発達している。すでに、預言者そのものが持つ預言者性(nubuwwah)という概念も、根源的存在としての神とその被造物のあいだに立つ仲介者として存在論的意味を与えられている。“神の代理権”としてのヒラーファトにも同様に存在論的意味が与えられている。この議論は神智学（イルファーン）の発達とともに深められたものである。ここで簡単に、ヒラーファトという言葉がイルファーンの中で持っている存在論的意味を説明しておく。この概念は存

在の表層と深層についての透徹した思索より出てきたものである。この存在についての思索にはイスラーム世界に長い伝統があるが、その最もよくまとめられた形のものを以下に見ておく。

アッラーメ・ラフイーイー・カズヴィーニーやアーヤトッラー・ホメイニーの高弟であるマシュハド大学のサイイド・ジャラル・ウッディーン・アーシュティアーニー教授はこの存在の3つの次元について次のように述べている。

「存在には3つの相もしくは次元がある。その第1は純粹存在である、それはまさに存在のリアリティーの相である。この相こそが前章で述べたように、無限定、本質不可知、隠れた宝、秘中の秘、西方(マグリブ)の不死鳥(アンカー)、不称・不説の境なのである。このようなりアリティーには本質の点からすれば無規定なのである。

第2の相は無条件の存在、展開する存在、被造物の真相、聖なる流出(フェイズ・ムカッダス)の相である。神智学者たちによれば第一者から発生するのはこの存在であるとされている。この存在の効果と機能は外在的な効果と機能と包括である。それはその一性によって、知的、観念的自己規定性におけるあらゆる形象(marā'io majālī)を外在となし、固有の存在的働きによって存在者とするのである。外在的諸相はこの存在から派生してくるのである。存在のこの相は、無条件的自己規定作用のゆえに必然者のレベルよりは下位に位置し、存在りアリティーの純粹性の位格は持たず、その意味では神の行為なのであるが、それ自体では神と一体なので(真正精妙の一致)可能的何性によって限定されることはない。したがって、存在論的欠如を意味する何性的限界とは無縁である。このゆえに、悟達円成の人びとはこの存在の自体的創出とみなすのである。

第3は限定された諸存在の相である。それは効果と呼ばれているも

のである、そこで次のように言われるのである。すなわち、存在レアリティーそのものは神 (haqq)、無条件存在を(神の) 行為 (fi'l)、限定された存在を神の効果 (athar) であると。この限定された存在は無条件的存在とある点では一致するが、ある点では一致しない。限定された存在が無条件的存在によって存立しているという点では一致しているが、無条件者は本質のレベルでは限定とは無縁であるため、無条件者のレベルでは一致がない。

聖なる流出である無条件存在は、恒常的形象 (a'yān thābitah) の次元の根拠であり、かつ神名と属性の位階である至聖の流出 (fayd aqdas) と一致している。それらの間の違いは凝縮と拡散の違いである。神と自体的に結び付いているのはかの至聖の流出なのである。無条件的存在は限定された存在にたいして階位上の先行性を持っているが、その本質のレベルでは何性を持っていない純粹存在なのである、しかし何性の自己規定は神のこの絶対的行為にとって偶有するものである。これゆえに、

我と汝は存在の本質に偶有する 我らは顕在の鏡の網目なり

と言われている。

この存在は本質との結合のレベルでは絶対的純粹と一致し、しかもすべての本質を貫通している。それは理性において理性であり、靈魂において靈魂であり物質において物質である(毒において毒、薬において薬)。それが、あらゆる本質を、神の定めレベルにおいて神名と属性に準じて知的ありかたを持ち、資質に応じて存在の要求をするかの本質の根本的要請により顕現させるのである。」³⁾

存在は大別して3つのレベルを持っている。すなわち、(1)純粹存在もし

くは秘中の秘、あるいは西方の不死鳥、隠れた宝などと呼ばれるレベル、(2)展開する存在もしくは無条件の存在、(3)個別的、限定された存在、の3つである。純粹存在は認識を超越したものである。この隠れたる宝である純粹存在が、認識可能な個別的存在のレベルに転化するプロセスが創造のプロセスなのである。なぜそのような創造が行われるのかということは「私は隠れたる（知られることのない）宝（kanz makhfiy）であったが、次いで知られることを好んだ、そこで私が知られるために被造物を造った」という聖なる伝承に象徴的に示されている。すなわち、根源的存在の最奥に知にたいする愛がよこたわっているのである。それこそが創造のエネルギー源なのである。そのレベルでは無分節にあらゆる個別的存在が凝縮されて統一されている。これは絶対無分節のレベルであるから認識を超越しているのである。このレベルにおいて根源的な知への愛が働いて、分節が始まる、そして最初の明確な分節が生じ展開する存在という存在一般が出現し、さらにその展開する存在が経験される個別的存在のレベルに転化する。これが創造のプロセスの概略である。

秘中の秘、西方の不死鳥なる絶対純粹存在はペルシアの神秘思想詩人ハーフェズの詠うように、預言者であれイマームであれ到達することのできない境域なのである。

不死の鳥だれか捕えようか、罌をこそおけ
罌にはかしこに常に吹き過ぎる風のみ⁴⁾

創造はこの絶対純粹存在の自己開示なのである。ところで、この絶対純粹存在もしくは西方の不死鳥と呼ばれているものは、認識を超越したものではあるが、それは概念化されてはいないにもかかわらず、ある超越的一者として象徴的に語られるものである。それは純粹の一者である。ところが、このレベルを越えたところにじつはもう1つのレベルがある。それは

言忘絶慮のレベルでもはや象徴的にも表現し得ないレベルなのである。まさに無の境域である。それは絶対純粋存在の裏側ともいべき境域である。老子の思想における“玄のまた玄”の境域である。便宜的にそれは存在の芯とでも名づけておく。そこから絶対純粋存在が立ち現れてくるのである。この絶対純粋存在は純粋な一者として措定される。それは絶対純粋存在の持つ絶対純粋一性“アハディーヤ (ahadiyah)”レベルでの存在である。この“玄のまた玄”のレベルから絶対純粋一性のレベルに顕現することを至聖流出(fayd aqdas)と呼ばれている。この至聖流出によって、いわば「無」から「有」に転化する。この場合の「有」は、もちろんかの絶対純粋存在の意味であるから、経験的「有」ではない。しかしながら、この絶対純粋存在は存在の芯である「無」を知らしめる機能を持つ。その意味で絶対純粋存在は「無」にとっての代理権 (khilāfah、ヒラーファト) を持っているといわれるのである。絶対純粋存在は「無」の代理者 (ハリーファ、もしくはカリフ) と考えられている。隠れたる存在の芯 (無) の最初の開示が、神的普遍性の代理権のレベルとも呼ばれ、それが隠れたる存在のカリフ (代理者) となる。この絶対純粋存在は、繰り返し述べることになるが認識を超越している。しかし、このレベルの存在は隠れたる宝とか西方の不死鳥という比喻によって示されるのである。その意味では、絶対純粋存在は“玄のまた玄”のレベルほどには超越の度合いが徹底していないといえることができる。いずれにせよ、“絶対純粋存在”は“玄のまた玄”の最初の自己開示であり、それは“玄のまた玄”に代わって、創造の事実上の出発点となるのである。このことは、“絶対純粋存在”がそれ自身につづく諸存在と諸存在レベルにたいして優位性を持つということを意味している。すなわち、この絶対純粋存在＝アハディーヤは原初的多数性の根拠でもある。アハディーヤは普遍的神性、すなわち種々の神的エネルギーの出現以前の状態の神なのである。しかし、このアハディーヤ・レベルの神は瞬時にして多様な属性として認識されるエネルギーをとまって、より具体性を濃厚にそ

なえて認識されるようになる。換言すれば、“玄のまた玄”はアハディーヤ・レベルの“神”を代理者として多様性の根拠である神の諸属性を出現させる。

すなわち、神的代理者アハディーヤを通じて“流出”は神的諸名称と諸属性のレベルに進行していくのである。神的諸名称と諸属性は多様ではあるが統一されていて、神の絶対純粹一性に抵触しない存在様式を持つ。この神的レベルで多が一に統一されているレベルを統一的一性ワーヒディーヤ (wāhidīyah) のレベルと呼ばれている。このワーヒディーヤのレベルの統一的一性が経験される世界における個々の事物の持つ一性の根拠となっている。ワーヒディーヤから経験的一性の世界への転化を神聖流出 (fayd muqaddas) とよぶ。この場合、ワーヒディーヤはアハディーヤの代理者として直接に被造物の創造に拘わる。ここにも、“玄のまた玄”から“絶対純粹存在”に転移する際に現れた“代理権 (ヒラーファト)”が再び現れてくる。

この存在流出のプロセスの第1段階において現れる“代理権”は、存在世界全体を貫通しているとされる。この“代理権”が預言者ムハンマドの“代理権”の本体なのである。それは、全世界に見られる“代理権”という現象の根拠であるとされている。ホメイニーは「ヒラーファトとウィラーヤトへの導きのあかり」という著作のなかでこの主題を次のように記している。

幽邃なる神気の霧 (‘amā’) の帳の内に座し賜い、属性と神名の陰に隠れ賜いし神に称えあれ。神はその光輝の激しさにより自らを隠し賜い、顕現しつつも、その聖美の光のために超越し隠れ賜う。神はその圧倒的偉大さのゆえに神の友どもの心にも隠されている。されど、神はその光の照射によって代理者たちという鏡のなかに現れ賜う。祝福と平安が光の根拠、秘中の秘の本尊、絶対無 (ghayb al-hūwiyyah)

の中に沈潜せし者、分節的自己規定の消滅せし者（これらの呼び名は“玄のまた玄”とおおむね同義である）のうえにあらんことを祈る。それは、“代理権（ヒラーファト）”の本質の絶対的根拠であり、“監督権（ウィラーヤト）”の地位の絶対的精髓である。それは、光輝の激しさのなかに覆い隠され、光輝と聖美の両の手により隠される者である。同時にそれは、純粹一性（アハディーヤ）の秘密をすべて開示する者、神の実在（haqā'iq ilāhiyah）のすべてを顕示するものである。それは、完璧にして高貴このうえなき鏡、すなわちわれらが先達ムハンマド、彼とその家族に神の祝福と平安があらんことを祈る。彼らはこのうえなく褒めたたえられるべき代理権の天圏から上りいでたる太陽たち、最上の監督権の地平にかがやく月たちである。……」⁵⁾

この書物の中でホメイニーは次のようにも述べている。

「開示の根拠となる神の代理者、聖なる本質には必然的に絶対無に対する隠蔽の相がある、この相は決して現れない、さらに一方で神の属性と神名に対する相がある、この相は属性と神名において顕現し統一的一性のレベルでの形象として現れる。」⁶⁾

この神の代理者とはアハディーヤを意味する。絶対超越の純粹存在である“玄のまた玄”が比喩的、象徴的に顕現してきた時点がアハディーヤの存在界である。これが“玄のまた玄”そのものに代わって、続くレベルの流出の出発点となる。すなわち、多様な神の属性の淵源となるのである。ホメイニーはこの神の代理者について、次のようにも述べている。

「この代理権（ヒラーファト）はムハンマド的代理権の本質のことである。前者が後者の主であり、根拠であり、出発点である。そこに

存在者すべてにたいする代理権が由来している。さらに、それは代理権、代理者(ハリーファ)、代理者として指名された者の根拠なのである。この代理権がムハンマドの本質の主、神的普遍的諸本質の根拠である「神」という偉名のレベルにおいて完璧に発顯している。したがって、「神」という偉名のレベルは代理権の根拠であり、代理権とはその顕現である。それより、むしろ「神」という名のレベルに現れているものが、代理権そのものである、というのは顕現する者と顕現されたものとは一致しているからである……」⁷⁾

つまり「神」という包括的名称は“玄のまた玄”をほのめかしている代理者なのである。したがって、「神」そのものが「ハリーファ」なのである。それはムハンマド的本質の別称でもあるのである。すでに見たようにこのレベルにおいて神名と属性としての多様性が出現し、その一元的レベルの多様性が経験的世界の多様性の根拠になっているのである。したがって、「ハリーファ」としての「神」はさらに下位のレベルの存在に代理権(ヒラーファト)を付与することになる。この意味では、世界のすべての個別的存在者は「神」のハリーファ(代理者)ということになる。

ところで、このハリーファ(代理者)ないしヒラーファト(代理権)はもう1つの相を持っている。ホメイニーはそれについて次のように述べている。

「このヒラーファトというすでにその地位と権能と意味とについて聞き知ったところのものは「監督権」(ウィラーヤト)ということと同じである、なぜならウィラーヤトとは“近い”という意味であったり、“親愛さ”という意味であったり、“支配権”という意味であったり、“主人であること”という意味であったり、“代行者性”という意味であったりする。しかもこれらの意味はすべてこのウィラーヤトという

本質の真実なのである。もろもろのレベルの存在はこの本質の影なのである。このウィラーヤトが高貴なるウィラーヤトの主人となるものである。そして、高貴なるウィラーヤトとはムハンマド的ヒラーファトと神の意識と神の創造の両方の次元において一致している。……」⁸⁾

さらにホメイニーはウィラーヤトとヒラーファトの関係について次のようにも述べている。

「すでに説き明かした説明と解説によって、一神論者の宗祖、神智者の導師、信徒の長アリーという言葉の意味が解ることと思う。彼は言う、私は預言者たちと密の相 (bātin) において一緒であった、また神の使徒 (預言者ムハンマド) と顕の相において一緒であった。なぜなら、神の使徒は普遍的無条件的ウィラーヤトの所有者であって、ウィラーヤトはヒラーファトの密の相であり、普遍的無条件的ウィラーヤトは普遍的無条件的ヒラーファトの密の相だからである。……」⁹⁾

すなわち、ヒラーファトとは代理者となるものが持つ資格のようなものであり、それはまた代理を引き受けた者が代理を依頼した者にたいして持つ責任に相当する。代理を依頼した者を、かりに上位に位置するとすれば、代理を引き受けた者は上位にたいして責任を持つ。アリーは神の使徒ムハンマドの代理としてともに行動した。このことは、アリーが神の使徒の代行の責任を負ったということである。アリーにおいて代理権が顕の相において現れたということである。他方、神の使徒ムハンマドはウィラーヤト (監督権) の所有者としてアリーにたいして監督権を持つ。

アリーとムハンマドの両者がともにこの世にあって、一緒に行動するかぎりアリーはムハンマドにたいして持つ代理権 (ヒラーファト) もムハンマドがアリーにたいして持つ監督権 (ウィラーヤト) もともに実在的に認

識できる。しかしながら、この場合にも代理権は監督権の頭の相であり、監督権は代理権の密の相なのである。代理権と監督権は常に表裏一体となっている。ということは、代理権のあるところにはかならず監督権があるということである。“玄のまた玄”、“絶対純粹存在、アハディーヤ”、“統一的存在、ワーヒディーヤ”という存在流出論レベルの事実の間にも同様の関係が成り立つ。すなわち、アハディーヤは“玄のまた玄”について代理権を持つ。この代理権が普遍的無条件的ヒラーファトとよばれるものである。他方、“玄のまた玄”たる者はアハディーヤにたいして監督権を持つ。これが普遍的無条件的ウィラーヤトを持つ。アハディーヤとワーヒディーヤのあいだにおいても同様な“相互関係”が成立する。ただし、すべてが未分化の状態にある神的世界のレベルでのこのような諸事実のあいだには関係という概念はあてはまらない。これらは神的普遍者のなかに“集一(jam’i)”状態にあるからである。「神」という偉名によって表される神的普遍者(kulliyyah ilāhiyah)は普遍的無条件的ヒラーファトであると同時に普遍的無条件的ウィラーヤトでもある。

ところで、すでに見たようにウィラーヤトは、創造的ウィラーヤト(wilāyat-e takwīnī)と法制的ウィラーヤト(wilāyat-e i’tibārī)、もしくは立法的ウィラーヤト(wilāyat-e tashrīī)に分類されている。創造的監督権(ウィラーヤト)とは、ホメイニーの「法学者の監督権」の中で示しているように¹⁰⁾、神的普遍的代理者権と同じ意味である。それは経験の世界においては神の使徒と諸イマームと神の使徒の娘にしてアリーの妻ファルティマ・ザフラーが所有している。これは創造的ウィラーヤトが特別な地位を意味するということである。ホメイニーが指摘しているようにファルティマ・ザフラーが為政者とはならなかったにもかかわらずこの創造的ウィラーヤトを持っているということが重要なのである¹¹⁾。

為政者はムスリム共同体の指導者として預言者ムハンマドの持っていた

職能を代行する。したがって、ムスリム社会における為政者は“代理権(ヒラーファト)”を持っている。この“代理権”は、すでに見たように神智学的には“監督権(ウィラーヤト)”と表裏一体となっている。一般的にウィラーヤトはヒラーファトの密の相であり、ヒラーファトはウィラーヤトの顕の相なのである。したがって、ウィラーヤトのあるところには必ずヒラーファトがあり、ヒラーファトのあるところには必ずウィラーヤトがあると思えるべきであろう。しかしながら、ファーティマ・ザフラーのケースについては、ウィラーヤトを彼女が所有しているにもかかわらずヒラーファトを実際に持つことはなかったのである。この事実は我々をウィラーヤトという概念について再考をうながすものである。ファーティマ・ザフラーにおいて、ウィラーヤトがあつたにもかかわらずそれがヒラーファトとして現れなかったということは、この両者が表裏の関係にあるにもかかわらず時にはウィラーヤトがヒラーファトを伴わずに現れるということである。このことは、ヒラーファトがつねにウィラーヤトとともに現れるのに反して、ウィラーヤトはヒラーファトを伴わないことがあるということである。ウィラーヤトがヒラーファトを伴わないでも存在し得る、ということはウィラーヤトがヒラーファトよりも存在論的には上位にあると見なして良いであろう。とりわけ、創造的ウィラーヤトについてはこの存在論的優位性を明確に認めることができる。

ところで、このような創造的ウィラーヤトを考察するに際し、ウィラーヤトについてのS・J・アーシュティアーニー教授の説を考慮にいれる必要がある。アーシュティアーニー教授はその著『フスース・ル・ヒカムの“カイサリーによる序文”の解説』の中で次のように述べている。

「W、L、Y、の語は始めのWがイという母音をとれば(すなわち、ウィラーヤトと読まれれば)、それは imārat (rule)、tawallīyat (trusteeship)、あるいは saltanat (regnancy) という意味になる。し

かしこの語が最初の W にアという母音をとれば(すなわち、ワラーヤトと読まれれば)、それは愛 (mahabbat) という意味になる。ワラーヤトという言葉はワリー (walī、神の近い友) という言葉に由来し、それは“近しさ”という意味で用いられている。ウィラーヤトという言葉のほうは、神智学者たちのあいだでは普遍的眞実在とされ、それは神の本質的属性のひとつであり、神の自己開示の源かつ自己規定の出発点であり、それに神的属性が付着する。またそれは被造物の本質が出現する原因であり、さらにそれは神の知の領域における神名の顕現の原点である。“神は誉むべき主”、“神は信徒の主にして、彼らを闇の世界より連れ出す……。”

ウィラーヤトの本質は、哲学的考察に基づけば、あらゆる実在的本質を照らし出す存在に等しい。その自己存在規定の始まりはアハディーヤの存在レベルであり、その終着点は可感的物質世界である。それは必然存在、可能的存在、純粹存在、質量的存在を含むあらゆる事物に貫通浸透している。

“近しさ”という意味での“ワラーヤト”は多様な段階と様々の現れ方を持っていて、それは神の本質の事物への近さに由来する、というのもワラーヤトはあらゆる存在現象にたいして恒常的かつ普遍的付帯性を持つからである。“多性の総体は神の唯一性により神のために存続する。”

ワラーヤトは無条件的ワラーヤトと限定的ワラーヤトに分類される。また普遍的ワラーヤトと特殊のワラーヤトにも分類される。この概念が無条件的なものと限定的なものに分類されたり、無条件性と限定性として修飾されたりするのは次のような理由による。すなわち、ワラーヤトは神の属性のひとつである限り無条件者であるが、他方、ワラーヤトが預言者と神の友 (アウリヤー、ワリー) に根拠を持つと

いう点では限定されているのである。ところで、すべて無条件的なるものは限定されたもののなかに脈々と流れている、そして限定されたものの存在原因となっている。また、あらゆる限定された者は無条件なものによって存在している。というのも、限定された者は無条件な者の下方流出であり、無条件な者は自己顕現、自己開示、下方流出により限定、関係、制約の基体となるからである。預言者と神の友のワラーヤトは無条件的ワラーヤトの一部分であり枝葉である。彼らの持つ預言者性もまた無条件的預言者性の一部分である。

ワラーヤトは信仰を持つすべての人に共通するという意味では普遍的ワラーヤトとなる。信仰を持ち、正しい行いをする者はだれでも、“神は信徒の主にして、彼らを闇の世界より光の世界へ連れ出す”という句に準じて、ワラーヤトという普遍概念の述語対象となる。信仰の最上級は実在の真相と正しく一致した直観に該当する。中間の信仰は神智学者のうちで論証と思索する人の楽しみにあたる。最下位の信仰は信頼できる人に学ぶことから得られるものである。これは一般大衆の信仰である。

特殊的ワラーヤトは神秘的直観の道を行く人たちだけのものである、すなわち、彼らが神の中に消失し、知と直観と心の本質の点で絶対の神の存在により存続する時に（神秘道の旅人は、本質と属性と行為とその所産の点で神の中に消失するが、それを滅却（mahq）、滅尽（tams）、消滅（mahw）ともいい、それは別の表現では本質と属性と行為と所産のうえでのタウヒードとされる）、この特殊的ワラーヤトの境地に達する。」¹²⁾

ここで創造的ウィラーヤトとワラーヤトとの関係を整理しておくことが必要である。第1に創造的ウィラーヤトは、アハディーヤのレベルにおける概念である、それは普遍的真理としてそれ自体「神」の属性でありつつ、

その他の属性の基体ともなる。すなわち、ワーヒディーヤのレベルでの多性の根拠でもある。それと同時に、創造的ウィラーヤトには、それ自らよりもう1段上の“玄のまた玄”を代行するものとして“代理権（ヒラーファト）”の密の相ともなっている。

ワラーヤトのほうは、これもまた神の属性とされている。神の属性としてのワラーヤトは無条件のワラーヤトとなる。神秘道の旅人は最終的にはこのワラーヤトに到達するとしている。その限りでは、神の属性としてのワラーヤトはワーヒディーヤのレベルでの存在である。それは、アハディーヤのレベルではない。なぜなら、アハディーヤは、すでに見たように“西方の不死鳥”とも“隠れたる宝”とも呼ばれ、いかなる人にも捕えられることがないからである。したがって、無条件のワラーヤトは創造的ウィラーヤトより存在流出のレベルでは下位に位置する、と見なすことができるであろう。

しかしながら、創造的ウィラーヤトも無条件のワラーヤトとともに森羅万象を貫通しているとされる。世界内の事物のどれ1つとしてこの両者を帯びていないものはない。個々の経験的事物が創造のプロセス、すなわち“玄のまた玄”より発し、“アハディーヤ”のレベルに超越的自己開示をし、その結果“ワーヒディーヤ”のレベルで神の諸属性として多性の根拠が生じ、その多性が経験世界の諸事物になるという創造のプロセスの所産であるのだから、この創造のプロセスの神的存在領域において現れる、ウィラーヤトとワラーヤトが経験的世界の個別的事物にそれぞれ現れてくるのは当然のことである。

ところでワラーヤトがウィラーヤトよりも存在流出において下位にある、ということはワラーヤトがウィラーヤトの頭の相になると見なすことができるであろう。換言すれば“監督権（ウィラーヤト）”は“愛、近しさ（ワラーヤト）”の密の相であるということになる。監督権が愛として現れるということは日常的世界においてもしばしば見受けられることである。

かくして、存在流出の3つの層のあいだにウィラーヤト、ヒラーファト、ワラーヤトの概念を差し挟んでみると、存在が極めて内容豊かなものであるということが見えてくる。存在は豊饒なる無よりいであて、アハディーヤの純粹存在として原初的自己開示をし、さらに流出がすすみワーヒディーヤの多性の原因としての神名・属性的存在レベルに到達する。そして最終的には個々の経験的事物として現れてくる。存在はこの流出のプロセスの全体を包むものである。しかしながら、このダイナミックな生成流出を存在という意識の表層レベルではややもするとスタティックな意味しか持ちえない概念でのみ捕えようとする存在のダイナミズムが見えてこなくなる。しかし、ウィラーヤト、ヒラーファト、ワラーヤトというそれぞれ各存在レベルの持つ関係性と志向性を示す概念を差し挟むと、存在流出の諸層は緊密に凝縮した統一体であることが見えてくる。同時に、それが無限に拡散しながら一体性を維持しているエネルギーの塊のようなものをなしているということも見えてくる。本稿においては存在流出の中において語られるイマーマト（イマーム性）、ヌブーワト（預言者性）の概念が持つ意味と機能について考察する紙幅がなかったが、これについてもさらに稿を改めて論じてみたい。

注

- 1) M. A. Shāhābādī, *Rashahāt al-Bihār*, Nahzat-e Zanān-Mosalmān, I.C. 1360, pp. 44-45. この書物は著者がアラビア語で書いた本文に自らペルシア語で注釈を付けている。引用した文章はペルシア語の注釈部分にある。
- 2) *Ibid.*, p. 46.
- 3) Sayyed Jalāl al-Dīn Āshtiyānī, *Hastī az Nazar-e Falsafe o Irfān*, Chāpkhāne-e Khorāsān, undated, pp. 179-180.
- 4) Hāfez (ed.), *Allāme Muhammad Qazwīnī*, Intishārāt-e Asātīr, I.C. 1367, p. 100, ガザル第8。

- 5) Āyatollāh Khomeinī, *Misbāh al-Hidāyah*, Peyām-e Āzādī, I.C. 1360, p. 15.
- 6) *Ibid.*, p. 30.
- 7) *Ibid.*, p. 52.
- 8) *Ibid.*, p. 74.
- 9) *Ibid.*, p. 196.
- 10) Āyatollāh Khomeinī, *Wilāyat-e Faqīh*, Amīr-e Kabīr, I.C. 1357, pp. 67-68.
- 11) *Ibid.*, p. 68.
- 12) Sayyid Jalāl al-Dīn Āshtiyānī, *Sharh-e Moqaddame-e Qaisarī bar Fusūs al-Hikam*, Sāzmān-e Tablīghāt-e Islāmī, I.C. 1365, pp. 865-867.

〈本稿は、平成元～2年度文部省科学研究費助成金・一般研究(A)による「現代12イマーム・シーア派の思想・制度の総合的研究——原典研究を中心として——」の研究成果の一部である。〉

A Study on the *Wilāyat*

by Akiro MATSUMOTO

The concept “*wilāyat*” has an important meaning in the ontology of the Islamic philosophy. Its existence has many layers in Islamic ontology, especially in that of the school of the “unity of being.” From the viewpoint of emanation theory, which is also a theory of knowledge about existence, existence is divided into four levels, that is, the level of the mystery of the mysteries, the level of the *ahadīyat*, the level of the *wāhidīyat* and finally the level of the empirical existence. The level of the mystery of the mysteries is the starting point of emanation which goes beyond our understanding. Since this level of existence goes beyond human understanding, it is synonymous with “nothing.” But nothing here does not mean emptiness as long as it is the source of everything. It is fertile and productive nothing. At any rate, once this productive nothing is conceived as the source of everything, it is no longer nothing but becomes something. This something is existence at the level of the *ahadīyat*. The *ahadīyat* could be called the unconditionally posited oneness. The *ahadīyat* is the source of the universal oneness, that is, the *wāhidīyat*, which is the source of the countable oneness of each one of empirical existents.

Now, the word “*wilāyat*” has very important meaning in the above-

mentioned process of generation of the universe from “nothing.” It provides a connecting link between the layers of being. Basically the word “*wilāyat*” means closeness, nearness, intimacy and something like them. From these meanings are derived the meanings of friendship, guardianship, lordship and so on because such words as friend, guard and lord are the names given to the persons who have close relations with their partners. Therefore, philosophers of the school of the unity of being believe that the mystery of the mysteries has closeness, that is, “*wilāyat*” to the *ahadīyat*. And the *ahadīyat* has the same closeness to the *wāhidīyat*. And the *wāhidīyat* has the same closeness to the empirical things. Due to the concept “closeness,” the transcendental world composed of nothing (mystery of the mysteries), *ahadīyat* and *wāhidīyat* is understood as the highly condensed world which has neither time nor space. In fact, this transcendental world is the world of the realities which has real existence. In other words, this is the world of light. The empirical world is liken to the world of the shadows of those realities.

On the other hand, this emanation theory has another important concept which is related to the theory of legitimacy of rule in the field of politics. The concept is the concept of “deputyship (*khilāfat*).” In short, the *ahadīyat* is a deputy of that fertile and productive nothing which is higher in ranking than the *ahadīyat*. And the *wāhidīyat* is a deputy of the *ahadīyat* which is higher in ranking than the *wāhidīyat*. Finally, the empirical things are deputies of the *wāhidīyat*. In this way, each one of the things in the universe is being ornamented with the *wilāyat* and the *khilāfat* which are interrelated to each other. Due to the two key-concepts in the theory of existence, the world of being in

the Muslim philosophers shows itself as a very dynamic one which has love and power in it. In fact, the concept "*wilāyat*" means in some case the radical love of god towards his creatures. Basically the concept "*wilāyat*" means "care of a higher level of being for a lower level of being." It is understood in the sense of the guardianship of invisible God at the level of the mystery of the mysteries who cares for his creatures. Being in Islamic philosophy does not mean only "to be," but contains such meanings as *wilāyat* and *khilāfat*. It is a very fertile and complicated one. It is the basis of the Islamic *tawhīd* world view. The late Ayatollāh Khomeinī expounds in his "*Misbāh al-Hidāyah*" the theory of the *wilāyat* and *khilāfat* in the process of emanation of being. His understanding of *wilāyat* and *khilāfat* is the premise for his theory of rule which is expounded in his famous work "*wilāyat-e faqīf*." Then, inquiries into the concept of "*wilāyat*" in his "*Misbāh al-Hidāyah*" have important significance for understanding of the concept of "*wilāyat*" in the "*wilāyat-e faqīf*." On the other hand, the late Ayatollāh Shāhābādī, one of Khomeinī's teachers in his youth, has expounded the theory of existence and its relation to the concept of "*wilāyat*" in his "*Rashahāt al-Bihār*" in a very clear and concise manner. Ayatollāh Shāhābādī's ideas about *wilāyat* and existence is said to have exerted a great influence on Khomeinī's understanding of *wilāyat*. Therefore, a comparative study of the concept "*wilāyat*" by these Ayatollāhs may highlight its complicated meaning.